

1 単元名 「別子ファームの野菜を販売しよう」

2 単元目標

地域と協働して栽培した「別子ファーム」の野菜販売を通して、自然環境と人間の営み（生産・流通・消費）との関係を理解し、地域とお客様をつなげるために自分ができることを考え、仲間や地域、企業と協働して別子山地域の魅力を伝えようとすることができるようにする。

- 地域の自然環境を生かした農作物づくりの工夫や、それを商品化して販売する際に必要な知識について理解し、販売を通して地域の魅力を伝えることができる。（知識及び技能）
- 野菜販売イベントのPRや商品設計、地域と協働した販売方法など、地域と消費者をつなげるために自分ができることを考えたり、考えたことを販売の目的に合わせて形にしたりすることができる。（思考力・表現力・判断力）
- 販売を通して別子山地域と消費者をつなぐという目的意識を持ち、仲間や地域、関係企業と連携し、自他の良さを生かしながら課題解決に向けて試行錯誤して行動することができる。（主体的に学習に取り組む態度）

3 単元について

(1) 教材観

本教材の地域協働型農業体験学習「別子ファーム」は、地域の方から農地を借用し、生徒と地域の方が協働して野菜の栽培から収穫までを行う取組である。4年前から始まったこの取組は、当時の生徒の一人が、地域が抱える過疎化という課題をSDGsの考え方で解決しようと発案してスタートした。理念は「中学生と地域がパートナーシップを結ぶことで地域を元気にする。」である。小規模校である本校の特色を生かし、全学年で縦割り班をつくって活動するなど、全校体制で取り組んでいる。

本活動の特徴として、自然と人間の営みの原理原則を生徒が五感を通して学ぶことがあげられる。地域の自然環境を生かした栽培を行うために必要なノウハウを地域の方から学びとったり、天候や気温、自然災害などとの向き合い方を考えたり、実際に体を動かして畑作りや収穫をして、土の柔らかさや温かみ、自然の恵みを感じたりすることができるからである。

また、常に直面する様々な課題に対して、仲間や地域の方々と共に解決を目指していくことが求められる。自他の強みを生かしながら協働していくことで、課題解決の喜びに加え、地域への感謝や愛着、自己肯定感や自己有用感を高めることができる。なおその際には、9教科の学習で身に付けた、ものの見方や考え方を生かす場面も多く、この探究活動を通して、学ぶことの意義を感じさせることもできるであろう。

本単元の野菜販売は、別子ファームで収穫した野菜を商品化して販売することで、経済活動における商品設計や広報・PR、そして生産・流通・消費を実体験として学ぶことができる。実社会へのアクションを起こすことで、社会との接点を生み出せる本活動は、持続可能な社会の創り手にとって必要な資質・能力の向上に寄与する機会となる。

(2) 生徒観

本校の生徒は、少人数学習や寮生活を行うことを理解して入学している。そのため、何事においても意欲的に活動に取り組み、言われたことをきちんとやろうとする真面目な生徒が多い。一方で、人間関係形成力に個人差が見られることや、固定された人間関係による価値観の同質化も見られる。また、学力等の結果や外部評価に影響されやすく、自己肯定感や自己有用感が低い生徒もいる。学校と寄宿舎との往復が続く社会（地域）との接点が少なく、社会体験に乏しい一面もあり、社会に対する自分の考えが持てないものも多い。

本活動は、5年目を迎え、2、3年生はそれぞれ1、2年間の活動経験があるため、その経験を生かしながら1年生に積極的に関わることで学習を支えている。活動初年度は、野菜づくりをゼロから行い、収穫したものを調理したり、地域に配ったりするなど、本活動の土台をつくることができた。2年目には、初めて市内の観光施設と連携して野菜販売を行うことができ、商品が売れた手応えや、チラシやメディアによるPRが集客につながり、目的である別子山地域をアピールできた喜びを感じることができた。しかしながら課題も多く、地域との連携不足や、食品ロス、価格設定の在り方など、次年度につながる多くの課題を見出すこととなった。生徒たちは野菜販売後に、様々な課題を解決するための意思決定のスピードを上げるために、3つの部署（「野菜管理部」「地域連携部」「広報・PR部」）を組織した。今年度はこれまでの経験を生かしながら、生徒主体でさらなる活動の発展が期待できる。

(3) 指導観

本単元の指導に当たっては、まず昨年度までの別子ファーム及び野菜販売の課題を再確認し、今年度の野菜販売における目標の再設定を行う。昨年度から変化を加えても、そのまま継承してもよいが、大切なことは、売上をあげて儲けるというのが最上位目的ではなく、別子ファームの理念にそった販売にするという販売の目的について全員で意識統一を図ることである。また具体的に販売に向けた農作物の選定や苗植え作業なども開始する。

次に具体的な準備段階として、全体のスケジュールを確認した上で、各部署（「野菜管理部」「地域連携部」「広報・PR部」）の目標や具体的な活動内容、役割分担などについて話し合いを行う。自他の強みを生かしながら、部署内で連携するだけでなく、部署間や部署外（地域や家庭など）との連携も積極的に推進させたい。その際に教師は、「学びの伴走者」としてのスタンスを持ち、知識や経験の伝達を意識的に減らし、生徒に「問う」「託す」ことを重視して、生徒の自己決定を促していく。生徒は、それぞれの強みを生かしながら試行錯誤することを通して、多様な他者と協働して課題解決に向かわせたい。

単元の中に、外部講師を招き、商品設計についての学ぶ機会を設定する。生徒だけでは想像することが難しい商品設計の仕方について、外部から知識や助言を取り入れることで、生徒の視野を広げ、活動を発展させるアイデアを生むきっかけとしたい。

このような準備を重ねて、11月には2日間の販売活動を展開する。販売では商品管理や接客など、想定外のことに直面しながらも臨機応変な対応が求められることも多いため、教師はそれを生徒の成長の機会と捉え、生徒が他者と協働しながら主体的に解決できるように支援したい。

活動後には、全員で販売の目的や目標に沿った振り返りを行う。振り返り際には、野菜販売に関

する成果と課題に加え、自分自身の手応えやうまくいかなかったこと、そして気持ちの揺れ動きについても他者との対話や自己との対話を通して深い学びを実現し、次への意欲を高められる時間としたい。なお、今年度は持続可能な社会の創り手に必要な資質・能力を4つの観点に分けたループリック評価を作成し、自己評価や他者からのフィードバックがより生まれやすくなるようにした。

(4) ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

多様性…地域の方々の思い、野菜の育て方、販売方法など、唯一の正解はなく、選択肢ややり方は無数にあり、それぞれのよさを大切にする。

相互性…生命は循環していることを、土を耕す、苗を植える、育てる、収穫する、食べる、生ごみを堆肥化する、土をつくるという一連の循環を体感的に理解する。そのサイクルのどこかが不具合を起こすと循環は成立しない。また、生産・流通・消費を実践することで、基本的なビジネスモデルを体感し、社会との関連を理解する。

有限性…農作物には生命があり、自然災害や不適切な手入れなどにより生育環境が壊れると、作物は実らない。また、収穫した野菜を適切に調理できなかったり、食べ残しをしたりすることで食品ロスが発生する。

公平性…別子ファームが5年目を迎え、6年目以降に引き継ぐためには、やりっぱなしにせず成果と課題を整理して、発展的な活動にすることが求められる。

連携性…部署内や全体の間、地域の方などとの話し合いでは、多数決で物事を決めずに少数の意見も大切に聞く。お互いの対話の比率を5対5にすることを意識して、誰一人取り残さずに対話を通して合意形成を図る。

責任性…自分の持ち味を生かし、適材適所で課題解決に迎えるように、それぞれに特長に応じた部署に所属する。自分の強みで組織全体に協力し、責任をもってやりとげる。

・本学習で育てたい ESD の資質・能力

批判的に考える力

別子ファームの理念や目標の再設定を通して、安易に前例踏襲せずに常に発展させていけるアイデアや方法を探る。

未来像を予測して計画する力

販売のイメージを持って、計画・段取りする。また、10年後、20年後の別子山地域を考えることで、今すべきことを考える。

多面的・総合的に考える力

別子山地域内外、生産者と消費者、子どもと大人など様々な視点でものごとを捉える。また、活動の振り返りにおける自己評価や相互評価、教師からのフィードバックを生かして、自己を多面的に考える。

コミュニケーションを行う力、つながりを尊重する態度…

部署内、地域内、社会のあらゆるステークホルダーと対話を軸にコミュニケーションをとり、つながることでパートナーとなる。

進んで参加する態度

自分の強みで他者を補完し、周囲の強みを生かして協働で主体的に課題解決を図ろうとする。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

世代間の公正

異学年や小学生、地域の高齢者など、すべての世代にとって、自然環境に応じた人間の営みは不易のものである。

自然環境、生態系の保全を重視する。(生物多様性の重視)

地域の自然環境に適した農作物があり、その栽培の仕方も、その地に合ったものがある。

幸福感に敏感になる。幸福感を重視する。

立場の異なる人には、それぞれの幸福感があり、互いに尊重することで社会の幸福感を生み出せる。

・達成が期待される SDGs

3 健康・福祉 4 教育 11 まちづくり 12 生産と消費

15 陸上資源 17 グローバル・パートナーシップ

4 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 地域の自然環境を生かした農作物づくりの工夫や、野菜栽培に必要な知識について理解している。 ② 調べたり、学んだりして得た知識を目的に応じて言葉や写真を関連付けながらまとめる技能を身に付けている。	① 野菜販売の PR や商品設計、販売方法などを、地域と消費者をつなげるという販売の目的に沿って考え、適切に判断している。 ② 野菜販売の目的に沿って、自分たちが伝えたいことを相手に合わせて表現している。	販売を通して地域と消費者をつなぐという目的意識を持ち、仲間や地域、関係企業と連携し、自他の良さを生かしながら課題解決に向けて試行錯誤して行動しようとしている。

5 単元の指導計画（全 20 時間）

次	学習活動 (予想される生徒の発言や考え)	学習への支援	評価 (◎) 備考 (・)
1	○これまでを振り返り、野菜販売の目的を再設定する。 ・何のために野菜販売をするのか。 ・理念にそった目的になっているか。 ・食品ロスなどの課題を解決したい。	・昨年の販売における成果と課題を提示し、今年目的や目標について意識統一を図る。 (昨年度と同じ内容でも構わない。)	イ① ウ
2 3	○販売野菜の苗植えを行う。 ・事前の土づくりのポイントは何だろう。 ・大根、白菜などはどのように植えるのだろう。 ・地域の方に教えてもらおう。	・地域の方に生徒が自分から関わられるように促す。 ・指示の量を減らし、「問う」「託す」関わりをし続ける。	ア① ウ

4 5 6	○各部署の目標、活動内容、役割分担を決める。 ・食品ロスを減らす対策を考えよう。(野菜管理部) ・地域の野菜も一緒に販売しよう。(地域連携部) ・チラシを作って、メディアにも協力してもらおう。(広報・PR 部) ○部署の枠を越えた「販売特別部」の設置を検討する。 ○畑の手入れを行う。	・各部署担当教師が「学びの伴走者」として「問う」「託す」を重視して、自己決定を促す。	ア①② イ①② ウ
7	○商品設計のプロからノウハウを学ぶ。 ・付加価値を生むためにはどんなことが必要なのだろうか。 ・どんな工夫があると消費者に喜んでもらえるか。	・講師と事前の打ち合わせを行い、本活動の目的や理念を十分に理解してもらう。	ア①
8 9 10 11	○各部署での準備を進める。 ・日誌を使った品質管理を進めよう。(野菜管理部) ・地域の方の声を聞いて、連携できることを見付けよう。(地域連携部) ・チラシを作成しよう。(広報・PR 部) ○畑の手入れを行う。	・各部署担当教師が「学びの伴走者」として「問う」「託す」を重視して、自己決定を促す。 ・現実的に難しいことには、軌道修正を図る。	ア①② イ①② ウ
12 13	○販売直前準備を進める。 ・出荷までに必要な手順は何だろう。 ・手間が少なく、衛生的な梱包方法を考えよう。 ・輸送方法を考えよう。	・天候を予想させながら、限られた時間の中で、できるだけ鮮度を保って出荷できるような計画を立てさせる。	イ①② ウ
14 15 16	○野菜販売を行う。 ・お客様の興味をひく販売ブースをつくろう。 ・どのような声を掛けると関心を向けてくれるか。 ・在庫管理はどうすればよいのか。	・当日の想定外のことに直面したときが、生徒の成長の機会と捉え、他者と協力して課題解決できるよう支援する。	ア② イ② ウ
17 18	○学習成果発表会に向けて準備をする。 ・野菜販売の手応えや課題、地域への感謝を自分の言葉で伝えよう。	・うまく話すことが目的ではなく、自分の言葉で想いを伝えることを大切にさせる。	ア② イ② ウ
19	○野菜販売を振り返り、成果と課題をまとめよう。 ・地域の方とのつながりが強くなった。 ・消費者との今後のつながりをつくれなかった。 ・地域の人の喜ぶ姿にやりがいを感じた。	・個人とグループの成果と課題を分けて整理させる。 ・自己評価や相互評価を行い、多角的に自己を振り返る。	ア①② イ①②
20	○次年度に向けての提案 ・次世代につなげていこう！	・別子ファームを持続可能なものにする視点を意識させる。	ア② イ①② ウ

6 活動の実際

(1) 販売に向けての計画立案

昨年度の販売の反省点を振り返りながら、今年度の野菜販売の目的を再設定した。決定した目的は、「野菜販売を通して、別子山地域とお客さんをつなぐ。」となった。前年度を踏襲する結果となったが、改めて目的を確認し、生徒全員で合意できたことで、同じ目的に向けて活動する心構えや意識を持つことができた。今年は、昨年度に加えて、お客さんにつながり続けていくための仕掛けをつくって、販売だけの関係性にならないような目標を立てることにした。

(2) 地域の方との苗植え

事前にどんな野菜を育てるのかを生徒全員で話し合い、耕運機を使った土づくりから、苗植えまでを行った。地域の方に指導していただきながら、2, 3年生は昨年までの経験を踏まえながら1年生をサポートし、無事に大根や白菜、キャベツなどを植えることができた。



地域の方との苗植え

(3) 各部署の活動

野菜管理部は、野菜販売に向けて最も中心的な役割を担う部署になる。植えた野菜の管理方法を検討し、他の部署に伝達したり、害獣や害虫の被害から野菜を守るための対策を検討し、策を講じたりするなどの活動を行った。今年度の夏に、猿の害獣被害にあい、販売予定だったサツマイモをすべて食べ尽くされてしまったという苦い経験を生かして、金網を貼ったことで、猿の侵入は防ぐことができた。しかし、今年は長引く暑さの影響で、害虫の異常発生が止まらず、地域の方のアドバイスを生かしても多くのキャベツや白菜の葉は食べ尽くされてしまった。

地域連携部は、野菜販売の時にお客さんとお話するブース「おしゃべっし」を設置して交流を図るために、別子山地域や自分たちの活動を紹介する資料や動画を作成した。

広報・PR部は、チラシやポスターを作成することに加えて、今年は愛媛県全域に放送されるラジオや新居浜市内のローカルラジオに出演して、野菜販売をPRすることができた。



チラシ・ポスター

(4) 野菜販売

野菜販売では、別子ファームで育てた野菜の販売に加えて、地域の農家が育てた野菜を代行販売した。地域の方も応援に駆けつけてくださり、地域の方と連携しながら接客し、目的としている別子山地域とお客さんをつないだ。2日間の販売は無事に両日ともに完売した。また、お客さんとの交流ブース「おしゃべっし」では、当初なかなか人を呼び込むことができなかったが、積極的に声を掛けたり、声の掛け方を工夫したりすることによって、次第に人が集まり、時には1時間にもわたり話に花が咲くこともあった。



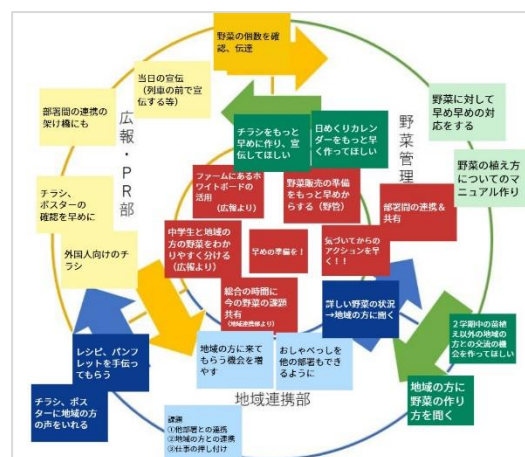
野菜販売の様子



交流ブースおしゃべっし

(5) 振り返り

野菜販売を終えて、Google フォームやループリック評価を活用して個人で振り返ることに加えて、その後各部署内で対話しながら、相互フィードバックを行うことで、さらに自らの経験を学びに変える活動を行った。ここでは、伴走教師から「もう一度同じメンバーで野菜販売がやり直せるなら何をするか？」という問いを生徒に投げ掛けて、反省点を具体的な改善案にし、来年度に向けた貴重な引き継ぎ資料をつくることができた。



各部署の連携を小グループでまとめた図 (生徒作成)

(6) 教師による伴走支援

昨年度に引き続き、教師同士でこの探究的な学びの伴走について対話を通して探究した。生徒たちの自己決定を促しながらも、暗中模索にならないように選択肢を提示したり、問いを立てたりしながら伴走したことで、できる限り生徒たちが自ら探究に向かえるように支援した。こうした対話があることで、自然と教師間の連携も進み、様々な生徒が異なる活動をする中でも、教師は状況を把握して伴走することができた。

7 成果と課題

生徒の振り返りアンケートやループリック評価、生徒間や生徒・教師間のフィードバックから得られた成果と課題をあげる。

(1) 成果

① 地域の方やお客さんとのつながり

地域の方には、野菜の育て方についてのアドバイスをもらうことに加えて、一緒に野菜販売を行うことができた。また、お客さんの中には、昨年度来ていただいた方が多数来場していた。事前に送ったハガキを持参してこられる方もおり、応援や激励の言葉を直接かけてくれたことで、生徒たちは自分たちが行動を起こしたことで、大人たちが動いてくれる実感を得ることができた。その結果、地域のために動けることにやりがいを感じるようになり、もっと地域に貢献したいという気持ちが湧いてくるなどの感想が多数あった。(ESD の資質・能力：コミュニケーションを行う力やつながりを尊重する態度)

② 行動を起こせば社会を動かせる実感

今年度は、野菜販売の PR でラジオ出演を果たすことができた。生徒自らが行動したことで、実現したことだった。また、対話交流ブース「おしゃべっし」への勧誘も前向きに行った結果、多数のお客さんとの交流が実現した。お客さんからは、「若い人が別子のことを大切にしてくれるのは嬉しい」という言葉もいただき、自分たちも行動を起こせば社会を変えていけるという手応えを得ることができた。(ESD の資質・能力：進んで参加する態度)

③ 過去の自分からの成長を実感

2, 3 年生に関しては、昨年、一昨年の反省点を生かして、改善できたという手応えが自己評価の中から複数書かれていた。例えば、野菜管理部に所属する生徒からは、昨年は猿の被害にあった

が、今年は害獣対策の金網を地域の協力も得ながら設置し、害獣被害を出さなかったことに充実感を得ていた。また、多くの生徒が、地域やお客さんとのコミュニケーションが取れるようになってきたことを手応えとして挙げていた。さらに、今年はループリック評価を使った生徒間の相互評価や教師からのフィードバックも行い、自己評価を他者の視点を基に訂正し、自己を客観的に捉えることもできた。(ESDの資質・能力：多面的・総合的に考える力)

(2) 課題

① 自然との向き合い方

今年は、害獣被害は防げた一方で、長引く残暑の影響から害虫が大量発生して多くの野菜を痛めてしまった。地域の方でも苦勞した状況だったとはいえ、対策に頭を悩ませる時間が多く、もっと緊密に地域と連携していれば、もう少し被害を食い止めることができたと言え、生徒自身も振り返っている。この経験を来年度に引き継ぐことで、うまくいかなかった経験が学びに変わり、自然と向き合いながら持続可能な活動を展開していく知恵が得られるものだと考えている。このことからESDの視点における有限性や連携性、責任性の視点での教師の伴走支援の在り方も課題といえる。

② チーム間連携の難しさ

部署をつくって活動していることで、各生徒の強みを生かした協働が行われた一方で、部署を超えた連携が不足していた。部長のリーダーシップや部員のフォロワーシップの両面において課題が残った。この点についても、生徒が振り返りの中で指摘し合うことができていたため、来年度以降に課題を解決できるように教師の伴走について引き続き探究したい。

③ 地域のリソースの減少

この点は、現実的に非常に難しいところではあるが、今後の活動において大きな影響を受ける重要な課題だと考えている。数少ない若い地域のキーパーソンとの連携を図り、地域リソースの開発やこれまでつながってきた方々の意向を踏まえた連携の在り方などを模索する必要がある。生徒の想いや行動はもちろん重要であるが、教師が地域コーディネーター的な役割を担う必要性もあるだろう。現在の総合的な学習の時間は、ESD主任や学級担任をはじめとした6名の教師がチームになって、学習計画や伴走支援を行っている。教師間の連携を図りながら、地域と持続的につながっていくことで、この課題を乗り越えていきたい。

(3) 来年度に向けて

① 教師が探究学習における伴走の仕方についての探究

教師が探究的な学びについての知見を増やすことが今後の発展において重要であると考えている。5年間の経験により、ある程度の学習プログラムは確立されつつある。ここからさらに生徒の自己決定を促し、主体的な活動にしていくためには教師自身が学ぶことが求められる。特に高校の総合的な探究の時間の実践に学ぶことで、教師自身の在り方がアップデートされると考えている。

② 地域の方と共に学び合う場づくり

野菜販売や夏祭りの共同企画にとどまらず、人と人をつなぐ対話のワークショップを行うことで、より強い関係性を構築したい。子どもと地域との深い対話の中で新たに生まれるプロジェクトこそが、これからのESDの学習活動の土台になると考えている。

現在の学年終了時に目指す姿

別子山地域を自分たちの第二の故郷だと思えることができ、この地域の未来を考える当事者として多様な他者と協働しながら、持続可能な社会の創り手として意志をもって共創していくことができる。



こんなに歴史あふれるところで生きているなんて幸せなことなんだなあ。

この町がどうすればもっとよくなるか真剣に考えていきたい。

社会科・地理的分野「地域の在り方を考える」

別子山地域は、深刻な過疎化が地域課題となっている。こうした現状を踏まえながらも、地理的分野で学んだことを生かして、この地域ならではの在り方を考える。そして、中学生ならではのアイデアを地域に提案し、アイデアを形にすることで、地域の大人と共にこの地域を支える当事者となる。

国語科「合意形成に向けて話し合おう」

話し合いの目的を共有したうえで、心理的安全性を大切にしながら、自分や他者の意見の共通点や相違点を整理することができる。また、様々な意見のメリット・デメリットを可視化しながら、全員が合意できるような結論が出せるようになる。

総合的な学習の時間「別子ファーム」

○主に養いたい ESD の資質・能力
コミュニケーションを行う力

部署内、地域内、社会のあらゆるステークホルダーとの対話を軸にしてつながることでお互いがパートナーとなる。

多面的・総合的に考える力

別子山地域内外、生産者と消費者、子どもと大人など様々な視点でものごとを捉える。

○主に育てたい ESD の価値観

世代間の公正

互いの強みを生かし合って協働するためには、共通の理念を共有した上で、社会の当事者として力を出し合うことが大切である。

多数決ではなく、少数派の意見にも耳を傾けて考えよう。

様々な観点から価格を考えないと適切な価格設定はできない。

自分にとって大切なこの地域をより多くの人に知ってもらいたい。

総合的な学習の時間

「別子ファームの野菜を販売しよう」

地域の方々と育てた「別子ファーム」の野菜を道の駅で販売することで、別子山地域の魅力を買収客にPRすることができる。そこでつながった方々が別子山地域のサポーターになるように自ら関わり続ける態度を養う。

社会科・公民的分野「市場のしくみと価格の決め方」

自分たちが生産した農作物の市場価値を踏まえて価格設定できるようにする。その際には、市場調査を行ったり、パートナーとなる地域の方からの意見を参考にしたりしながら、生産者・消費者にとって適切な価格設定をする。